

B01r 大学 VLBI 連携事業、光赤外線大学連携事業の狙い

面高俊宏（鹿児島大学）

電波望遠鏡を持つ4大学（北大、岐阜大、山口大、鹿児島大）と国立天文台が参加して、星生成領域や AGN の VLBI 観測の推進を図る大学間連携事業は 2005 年度よりスタートし現在では新たに筑波大、大阪府立大、茨城大が参加するネットワークに発展してきた。研究としてはメタノールメーザー、水メーザー輝線 VLBI 観測で得られた星生成領域の高空間分解能マップによる星生成メカニズムの解明並びに連続波 VLBI による AGN の研究が精力的に行われている。この大学 VLBI 連携の進展を受けて、2011 年度より文科省は光赤外線望遠鏡を運用している国内6大学（北大、東大、東工大、京大、広島大、鹿児島大）と国立天文台からなる光赤外線大学連携事業をスタートさせた。現在では、この光赤外線大学連携には新たに埼玉大、京都産業大、兵庫県立大が加わっている。研究としては世界的な天体観測ネットワークを構成し、ガンマー線、超新星、矮新星等の突発・変光天体の光、赤外線観測による新天体・正体不詳天体の特性の解明を目指している。

大型地上望遠鏡は共同利用研である国立天文台に集中し推進させるという国家の基本方針の中で、大学は学生、院生の教育・研究を独自にどのように進めるか？この VLBI と光赤外線の両大学連携事業が認可された背景、経緯並びに期待について述べる。